

いろいろなポータブル(電気)蓄音機 (那須科学歴史館展示品)

蓄音機が普及した1930年頃から手軽に持ち運んで何処にいても音楽を聴きたいというニーズが高まりポータブル蓄音器が登場しました。1940年代後半にポータブル電気蓄音器が登場し、1950年には33回転のLPレコードが登場しSPとLPレコードも再生できる機種が登場しました。また、この頃には機械式蓄音機のほとんどが生産されなくなりましたが、ポータブル蓄音器の名器といわれるHMV102は1960年代まで生産されました。

ユーホン1号
ニッポノホン
1911年



G-208
Columbia
1930~1940年



HMV-102
HMV
1929~1962年



Electrola PRE-1
日本 Victor
1952年



VF3
Radiomarelli
1957年



重量 : 9kg (バック込み)
大きさ (cm)
38 (D) * 23 (W) * 33 (H)

重量 : 7.3kg
大きさ (cm)
38 (D) * 16 (W) * 30 (H)

重量 : 7.2kg
大きさ (cm)
42 (D) * 16 (W) * 28 (H)

重量 : 5.5kg
大きさ (cm)
33 (D) * 14 (W) * 24 (H)

重量 : 5.1kg
大きさ (cm)
37 (D) * 18 (W) * 28 (H)

ニッポノホン ユーホン1号（日本）

本来、ポータブル型と言うより卓上型ですが、携帯用のケースが付いて少し重いですが持ち運ぶことができます。宮沢賢治が執筆のため旅館に長逗留する際、持ち込んだ姿を想像します。



ケースにしまい込む際、サウンドボックスやトーンアームなどをホーンの中に入れます



特 徴

- ・製造時期：1911年
- ・サウンドボックス：雲母
- ・ホーン：木工

ホーン内蔵卓上蓄音機の純国産名機。
30円の安価で大ヒット
宮沢賢治が愛用したと言われている

Columbia G-208 (アメリカ)

名機といわれる HMV 102 と比較しても音質は良いですがケースの作りはあまり良いとは言えません。



特 徴

- ・ 製造時期：1930~1940 年
 - ・ サウンドボックス：Columbia No.15
 - ・ ホーン：J型板金製
- ポータブル機中廉価版の普及機
しかし、性能は上級機と同程度。

HMV 102 (イギリス)

サウンドボックス No.5B により音質が良いといえますが、何といたっても全体の作りが良く質感が高いことが長年の間、愛されている理由ではないかと思えます。

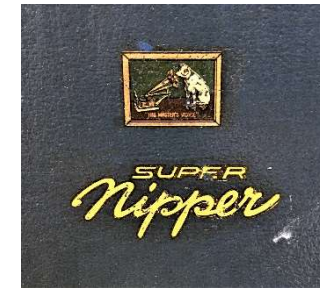


特 徴

- 製造時期：1929～1962年
- サウンドボックス：No.5B
- 世界最高のポータブル蓄音機
- 最も最後まで製造された蓄音機

日本ビクター Radio Electrola PRE-1 (日本)

内部の高密集度と高い操作性から当時の設計者の意欲を感じる電気蓄音機です。



特 徴

- 製造時期：1952年
- 高性能なラジオ付き
12SA7-GT, 12SK7-GT, 12SQ7-GT, 50L6-GT
- 高密集度により小型化を実現
- 高い操作性

Radio Marelli VF3 (イタリア)

シンプルながら高いデザイン性を持つ電気蓄音機です。また、PRE-1 に比べて内部も非常にシンプルで、日本とイタリアの優秀な設計者を比較して見ているような感じです。



特徴

- 製造時期：1957年
- SP/LP 兼用
- 真空管 PCL82 採用
- 高いデザイン性

